

9月20日 年間第25主日 マタイ20章1～16節 同じように支払ってやりたいのだ

今週はマタイの19章を飛ばして20章に入ります。その初めにイエスが語られるのは「ぶどう園の労働者のたとえ」です。ちょっと社会常識からは離れているように思える内容ですが、ここでも神の寛大さが示されています。わたしの好きな箇所の一つです。

社会の常識では、働いた時間に応じて賃金を支払うべきです。朝早くから働いた人が不満を訴えるのも当然ですね。たしかに主人が言うように、一日につき一デナリオンの約束で雇われたので「不当なことはしていない」といえばそうですが、一時間しか働かなかった人が同じ賃金なのはもらいすぎのように思えます。ではなぜ主人は労働時間に関係なく、働いた人に同じ賃金を払ったのでしょうか。

「わたしはこの最後の者にもあなたと同じように支払ってやりたいのだ」という言葉に主人の思いが表れているのではないのでしょうか。先週の福音の「借金を返せない家来」を哀れに思う主君の気持ちと共通しているように思います。「だれも雇ってくれないのです」と言った人は、雇ってもらえない理由があったと考えられます。体が不自由であるとか、高齢であるとか、体力がなさそうだから、ということでなかなか声をかけてもらえなかったのかもしれません。

わたしは神学生のときに東京の山谷で日雇い労働を体験したことがあります。朝早く待っていると次々とワゴン車がやってきて、「ビル工事現場5人、あんたとあんた」と指名されて車で現場に連れていかれます。やはり体力のなさそうな人は指名されず、あとまわしになります。仕事につけないかもしれません。今日の福音で夕方まで待っていた人もそうだったのでしょう。主人はそんな人を哀れに思って同じ賃金を払ってあげたのです。

このたとえ話を神との出会いと考えることもできるでしょう。人生の早いときに神と出会う人もいれば、人生半ばで、あるいは終わり近くに出会う人もいます。遅くに出会った人はそれまでの人生が価値のないものであったかというところではなく、神が出会うための道のりを用意してくださったということなのではないのでしょうか。洗礼の準備をされていたある年配の女性の方が「こんなにすばらしい教えならもっと若いときに出会いたかった」と言われたときにわたしはこの福音を思い出しました。いえいえ、神さまはちゃんと一番いいときに会いに来てくださったのですよ。

わたしたちはついついこの世のとらえ方で神との関係を考えてしまいます。「これだけ頑張って教会に来ているからほかの人よりたくさんお恵みをもたらえられるだろう」とか、「臨終の前に洗礼を受けて天国に行けるのはうらやましい」などと考えてしまいがちです。しかし、朝から働いた人はぶどう園にいられること自体が喜びであり、夕方から働いた人はそれまでの待ち時間に対しても賃金が支払われているのです。人生において神からの祝福、神から与えられる恵みはみな同じなのです。

(柳本神父)